東アジアを歩く・1

東アジアで どのような共同体が必要とされるか

藤 本 和貴夫

韓国では「黄砂特需」

今年は４月に入って関西でも激しい黄砂が飛来し、視界が悪い日が続いた。『北国新聞』によると、金沢で黄砂が観測されたのは４月24日までに６日で、昨年、一昨年とそれほど違わない。2000年から2002年までは３年連続で２ケタの観測日数であったから、今年が特に黄砂の飛来が多いというわけではないという。

私自身、これまでは黄砂を一過性の春の風物詩程度にしか感じていなかったのだが、今年は、住んでいる湖西から見える対岸の守山や野洲が、黄色い黄砂でどんよりかすんでしまっている。

行く春を　近江の人と　惜しみける

は有名な芭蕉の句である。しかし、これが春霞のなかで眺める琵琶湖ではないとすると、深刻にならざるをえない。

さらに、黄砂を深刻に考えるもうひとつの理由がある。３月の半ばに、私は、ソウルの漢江を見下ろすホテルから、やはり激しい黄砂で視界が極端に悪くなったソウル市内を見ていた。その前日、ソウルで見たテレビでは、北京市内のビルの玄関に積もった黄砂を、スコップで運び出す人たちの映像が映し出されていた。それが、次の日にはソウルが北京と近い状態になっていたのである。

日本に帰って、インターネットに流されている記事を見ると、最近の激しい黄砂が引き起こす健康上の被害を予防するため、ソウルではマスクを買う人、さらには空気清浄機を買う人で、「黄砂特需」が起きているという。日本ではなかなか想像できない事態であることだが、実感としてわかった。

環境問題は国境を越えて

黄砂は、ゴビ砂漠やタクラマカン砂漠といった中国内陸部の砂漠の砂が風で吹き上がり、偏西風に乗って大陸から朝鮮半島を経て日本に届くもので、太平洋を越えてハワイや米国にまで達する場合もあるという。内陸部の砂漠化が原因のひとつだとされ、これらの地域の植林のために韓国や日本から多くの人たちが国際的な支援に向かっているが、ただちに成果が望めるものではない。また、黄砂飛来のメカニズムそのものが完全に解明されているともいえないという。

ただし、大気中に浮遊する黄砂は、直接間接に地球の大気環境や気候に影響を与えていることが最近の研究で明らかになっており、黄砂に覆われた土地では農業の被害が大きく、さらに黄砂に付随して飛来する汚染物質が環境破壊につながる可能性があるという点も指摘されている。

環境問題に国境がないことは、昨年11月に起きた中国黒龍江省の化学工場爆発事故による松花江の河川水汚染が、さらに下流のアムール河の汚染となってロシアのハバロススク市の市民たちの生活に打撃を与えたことでも明らかである。しかも、このアムール河の汚染された水は、アムール河口からオホーツク海に出て、日本の沿岸に押しせることも予測される。毎冬、北海道のオホーツク海側に接岸する流氷は、アムール河からの水が海に流入し、そのために塩分が低くなった海水が凍ったものであるからである。黒龍江省の工場事故でさえ、環境問題という点をとれば、われわれにとっては無関係であるとはいえないのである。

しかし、これだけ見ると日本は被害者の立場にあるように見えるが、日本から持ち込まれる廃棄物が東アジアで環境汚染を引き起こしたり、日本企業が中国国内で環境汚染の原因をつくるといって批判されていることなども、周知の事実である。すでにわれわれは、環境問題では互いに国境が意味をもたない共同体となっているのである。実際、これらの問題を調査・検討するために、日本・韓国・中国・ロシアなどの間で共同研究プロジェクト・チームが、いくつも立ち上げられている。環境問題で即効性のある解決案がただちに提案されることを期待することは難しいとはいえ、環境問題を軸とした北東アジア共同体は、現実のものとなっているのである。

すすむ韓国の環境対策

私がソウルに行ったのは、現在の勤務校の姉妹校にあたるソウルの崇実（スンシル）大学校を訪問したからである。

1897年にアメリカの宣教師によってピョンヤンで創設され、1906年にキリスト教系の４年制大学となった崇実大学校は、朝鮮で最初に創設された大学である。同校のパンフレットによれば、1910年以降の日本の植民地支配下、多くのキリスト教系の学校が神社参拝に応じるなかで、同校は神社参拝を拒否し、1938年に閉鎖されている。第二次大戦後、日本の支配から解放されて再開した同校は、1954年にソウルに移り、現在は日本学科をもつ総合大学として、またサッカーの名門として知られている。大学の生協にあたる売店では、野菜を含め、無農薬のさまざまな食料品を売っていたのには目を見張った。

韓国では、環境問題への取り組みが進んでいる。ソウルでは、昨年10月に復元された、ソウルの中心部を西から東へ流れる清渓川（チョンゲチョン）に行ってみた。30年前、経済発展の号令のなかで、生活排水が流れ込み悪臭をはなつ中心部の川を暗渠化し、その上に高速道路が建設された。しかし、2002年の市長選挙では、この川の復元を掲げたイ・ミョンパク候補が勝利し、高速道路の撤去による川の復元が実現したのである。

清渓川は、市の中心部にある渓広場を基点とした全長5.8キロの人工の川で、名前のとおり、きれいな水が、勢いよく流れだし、所々に小さな滝や噴水、岸辺には展示スポットなどが作ってある。川幅は10メートルほどだが、水深は20センチで、子供が入っても大丈夫だということであった。昨年10月の、清渓川復元完成イベントには、３日間で15万人が集まったという。

清渓川の復元については大論争があった。しかし、復元された川は、新しい価値を日々創造しつつあるように見えた。私の行った日も、観光バスから降りたった大勢の観光客たちで、両岸はにぎわい、それを避けながらテレビのクルーが川の説明をするアナウンサーを撮影していた。おそらく、市の中心部で、高速道路ではなく、空が広々と見える景観が復元されることこ

そ、２１世紀の都市の新しい方向性ではないだろうか。われわれにとっても見習うべき点が多い。

低くなった「東アジア」の国境

昨年12月に、クアラルンプールで開かれた東アジアのサミットで、東アジア共同体を作ろうという動きが、浮かび上がってきた。これまでは、東アジアで共同体を作ろうとすることなどは、夢物語であるといわれてきた。現在では、25カ国で構成されるようになった欧州連合（ＥＵ）とは異なり、東アジア諸国では経済発展が不均等で、政治的には不安定であるというのがその理由であった。しかし、経済関係では、すでに国境の問題は、ほぼ乗り越えられている。われわれが日常、目にしている消費物資を見ることにで、東アジアでの国境が低くなっていることを実感できる。

文化の面でも、東アジア全域に広がる「韓流ブーム」や日本のアニメ、映画の共同制作など「共同」を支えるものは多い。ヨーロッパが共同体に向かって出発した際の原則が、「ヒト、モノ、カネ」の自由な移動であったことを思えば、東アジアにおいてはヒトの自由な移動の問題が残るのみであり、現在、この点ではＥＵも同じである。

政治問題で越えなければならない課題は多いが、サミットで取り上げられた東アジア共同体をめぐる論争は、東アジアの範囲をどこまで広げるかにあった。そしてそれは、共同体の結成へのイニシアティヴを誰がとるかという問題とかかわっている。具体的には、東アジア共同体のなかでの中国の影響力と、アメリカの影響力を、互いにどこまで抑えるかという問題でもある。

しかし、われわれにとって大切なことは、さきほどの崇実大学校が閉鎖の経験をもっているように、東アジアの国々の歴史の体験をおろそかに考えてはならないということ、そして互いの歴史や伝統を尊重するということにつきる。このことを誠実に実行すれば、他の多くの点では、共同体はすでに動き始めているのである。

（ふじもと　わきお・大阪経済大学教授）